



TITLE:

<学生の声>"仲良くなるため"の物理

AUTHOR(S):

重松, 英

---

CITATION:

重松, 英. <学生の声>"仲良くなるため"の物理. Cue 2017, 38: 63-63

ISSUE DATE:

2017-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/227457>

RIGHT:

## 学生の声

### 「“仲良くなるため”の物理」

工学研究科 電子工学専攻 白石研究室 博士後期課程1年 重 松 英

私が研究室配属前に抱いていた研究生活の主なイメージは、研究室の中でひたすらテーマを追いかけて実験や考察を進めるというものでした。実際には国際学会での発表や研究滞在など国境を越える活動が多いということは想定外でしたが、図らずも国際的な研究交流の醍醐味というものを知ることになりました。私自身は2015年春にベルサイユ大学・パリ第6大学の研究グループに研究滞在する機会を得ました。はじめての海外滞在経験であった不安をよそに、現地の学生やスタッフとコミュニケーション関係を築くのに長い時間はかかりませんでした。この理由について思い返してみると、滞在先との初対面時において、お互いの研究内容についてゼミを行ったことが大きな鍵だったような気がします。一般には、文化的なバックグラウンドが異なる相手とのコミュニケーションには困難が伴うものです。しかし、はじめに研究テーマを紹介しあい同じ科学を究める者として敬意を持ちつつ聞き入る、こういった研究交流特有の“儀式”を経たことが円滑なコミュニケーションの導入に繋がったのではないかと考えるのです。つまり、“仲良くなるための手段として”の研究や物理という観点を得ることができました。国際研究交流は多くの場合、研究自体の発展や深化に目的が据えられているものだと思います。しかし、科学研究を基軸とした交流は異なる文化を持つ人々との関係を構築する“手段”としても有用ではないかと気づきました。広がった視点に立てば、国際的な親善関係はこうした無数の個対個の交流によって支えられている面もあるのではないかと思います。国際情勢がより複雑さを増している昨今において、自然科学を基点とした交流が担う役割は大きくなっていくように思われます。

末筆ではありますが、フランス滞在においてご支援いただいた光・電子理工学教育研究センター 藤田研究室の先生方、在日本フランス大使館の方々に感謝申し上げます。

### 「博士課程：ルールに乗らない人生」

情報学研究科 通信情報システム専攻 佐藤高史研究室 博士後期課程1年 辺 松

博士課程に進学して、周りから若干浮くことが増えた。研究室外の人からはもちろん、博士課程の学生が少ない私の研究室では研究室内でも「勇気がある」、「優秀で研究好き」といったようにまるで違う人種のように見られることが度々ある。確かに、博士課程では必要とされる能力が高いと感じる時があり、それで失敗したり挫折したりもするが、私がいつも思うのが、「Don't take life too seriously」である。

私は自国の高校を卒業せずにアメリカの大学へ行き、そしてアニメが好きという理由で日本へ来た。そもそもルールに乗った人生を嫌っているためかもしれない。そして、最初に今の所属研究室に来たときに、いわゆるポジティブ・カルチャー・ショックというものを感じた。研究室の先生方も先輩方も、よく耳にする縦型社会の人間関係がなく、ルールに乗って「正しい」生き方にこだわる人もあまりいなかった。研究室にいるみんながアニメを見たり、ゲームをしたり、挙句の果てに研究発表をやり直されたりとしたカオスともいえる環境は、私にとって非常に居心地がよかった。そしてその環境こそが、博士課程に進学することを決めた理由だったといえる。博士課程に進学し研究者になりたいという大それた目標というより、ズコケたとしても人生を楽しめる人間になりたいという気持ちの方が強かった。

立てた目標を必ず達成し、安定かつ着実に与えられた任務を遂行し学位を手に入れる。それが博士に必要な覚悟と勇気であると考える人も居る。しかし私的には、自由に研究する過程を楽しみ、結果的にうまくいかなくてもそのうちまた頑張ればよいと考えている。何かのルールに乗って完璧な人生を演出するよりも、楽しく自由に研究する方に興味があったら、博士課程に進学してみるのもよいのではないかな。